1 われわれは(アリストテレスの)「十個の類と言われているものを調べることを、すべてを、一つの類に帰属せしめて、百つのいはば「種」のごときものすべてをその一つの類に従属せしめる人びと(ストア派)について語をして否たのであるから、次は、われわれの見解がプラトンの考えと一致するように努めながら、有なものどもについて、われわれがどう考えているかを話していくべきであろう
6 さて、もし<有なものの>を一つとみなさねばならないのか、
(1)すべての上にただ一つの類があるのかどうか、
(2)諸々の類は一つのものに従属しないのかどうか、
(3)諸々の原理を認める必要があるのかどうか、そのばあいに、
(イ)それらの原理は類に同じものであるとみなさねばならないのか、
(ロ)類は原理と同じものであるとみなさねばならないのか、
(ハ)それとも、原理はすべて類であるけれども、類のほうは原理ではないのか、
(ニ)あるいは、その逆であるのか、
(ホ)もしくは、そのそれぞれのばあいに、或る原理は類であるが、或る類は原理であるものか、
(ヘ)それとも、或るばあいには、すべての原理が類であるが、すべての類が原理であるばあいには、或る原理と或る類とがたがいに同じものであるのかなどという問題は、
いずれも調べる必要はなかったであろう
13 だが、われわれは、「有なものは一つである」と言っているのであるから
それらの問題についてもこれでみなければならないであろうが、その前に、見がいくつあるのか、どうしてそれはどうあるのかを中心に据えて検討していく必要があるであろう
18 すなわち、「われわれがく有なものの>と言っているのは何であるのか」という点と
「他の人びとはく有なものの>であるとされているけれども、われわれはそれを生成するものであって、本当の意味では<有なものの>ではないと言っているのかが何であるのか」という点が、それである(ティマイオス27d5-6)
23 なぜなら、<有なものの>と<有なものの>を一つの類に包括せしめることは、ソクラテスとソクラテスの肖像を同一の類に包括せしめるようなもので、馬鹿気たことがからである
28 すなわち、<類は<有なものの>に属している>ということは、<有なものは<有なものの>本来のあり方をいついかなる時にも決して偽みこのようにあるのであるのであるのであ